



岐山集

目次

祝辭

炎亦涼

論說

我が文章

通信

學校

校友會

寄宿舎傾り

會員移動

文苑

逆ける友(二)

旭將軍

夏の音

和歌

俳句

修學旅行日誌

雜報

大正四年七月二十五日 第六拾九號 (明治四十四年七月十五日) 每行五十字 (三種類郵便物認日)

祝辭

炎亦涼

○水道工事の完成を祝して感あり致
○山道にて林友各位に告ぐ

珍竹庵主人

禪曰「滅却心頭炎亦涼」とあり過日力石長野縣知事木曾山林視察旅行に際し大桑村定勝寺に立寄られ住職の乞に依り如上の七字を墨黒々と元氣よく揮毫せられ一座皆感に打たる余も隨行者の一員として親しく其眞意を察したのである世間には冬が來ればやれ寒い〜と嘆じ又夏が來れば暑い〜とコホスは常例であるが万物皆此變化に依り自ら其生と勇氣とを保持するのである平素實務繁忙なる廳中廳外の出來事は更に一層此念を強ふるのである然し此間自ら忙中有閑の域に達せんには前記禪味を自己の心理状態に認めねばならぬ然らざれば暑中の雜務公用も亦厭氣がさし來るものと信ず即ち炎中寒さを覺む寒中暑を思ふは心機轉換の一大妙味あることと思ふ梅雨晴れの七月上旬今や寒暖計は九十度近き善光寺畔の我庵に一封の小包は其名も涼しき木曾の山林學校寄宿舎一同よりの名にて到着す包中果して何物なるかと取る物も取り敢へず開き見れば之は〜暑中見舞の

扇子否普通世間並の暑中見舞にはあらずして至誠と厚意の沸々たる記念の扇子然かも亦普通ならざる記念の扇子裏表空地の存せぬ迄に認められたる言々句々讀去り讀み來つて益々涼氣を覺ゆるの切なるものあり之が來歴由緒は到底筆舌の盡す所にあらず舎監舎生の共同事業になれる奥ゆかしき水莖の墨痕滴る許り今今の動機を追想すれば神氣自ら新まり歡喜言ふ所を知らず胸中私かに万歳を三唱して木曾山林學校の吉慶を祝福するの外なし蓋し我職を同校に奉ずるの際或は風災あり或は火難ありと雖之れ皆一時的出來事にして問題は直ちに解決せるに係らず獨り水攻に至りては始終我神經を興奮させ時に心痛惜く能はざりしものありたり蓋し百有餘の舎生を有する同校に於て新築移轉後水利の悪しく或は四十二尺餘の空井戸を穿ちて涙を流し或は民林より水路を引きて途中屢故障ありて其目的を果さず炎暑の候或は斷水し極寒の候或は氷結せる等の爲田用水の濁水に顔を洗ひ乃至之を飲用せると約二ヶ年遂に万全の利水策を立つる迄は或は一時的設備に依り舎生を慰め居りしも遂に陳情書を監督官廳に差出し或は出縣して事情を〜此間學務土木の諸氏を惱ましたる事尠からず之が爲めには長官より關係者の責を問はるゝなど種々曲折ありて苦辛はしたるも遂に我が朋府は明察斷行昨

年の秋に至り臨時豫算中より千五百有餘圓を支出し以て演習林中岩ヶ澤の水を引き完全なる水道工事を起す事に決定せられた當時の喜は門外漢の知る能はざるもので當時の初め飛報一夕我耳を驚かし居る善光寺等に轉ずるの止むを得ざるに至り遂に山林學校在職中水道工事の完成を見るに至らずして憾を残して去つた爾來着々工事進捗漸く去六月廿日無事通水するに至り超えて廿七日舎生は此水を飲み此水に浴し此水に漱ぎ多年險難を経たる水問題完成の一大祝賀會を開催せられ遂に一同の喜びは扇面二葉に記念の言句を寄せ書して不肖の小庵に寄せ來る慕となれり茲に各位の赤誠溢る言句を公けにし共に其喜を別たんとす時に不肖と共に此間艱苦經營書策に餘念なかりし職員舎生諸君の協同一致の精神に對し感謝し以て當夏の炎を忘れ涼味を味ひ行末かけて之を記念したいと思ふ然かも演習林内より湧出する水を汲むとは取も直さず往年の卒業生諸氏が涵養せられし功績を汲むのである誠に自ら作りしもの自らの命を繋ぐに至る豈獨り山林の功德のみと謂はんやである濁水に代るに清水を以てせる墨痕又自ら異様ならざるなし扇面の字句師弟の情味と今昔の興味とを自然に汲み以て盛夏の涼氣を感ず翌日偶々宮林釜村氏我庵を訪は

る氏當時任福島にあり信毎紙上を以て當時の状況を屢々報導し常に後援者の地位に立ち此工の完成を速めしめたるの功勞者たり送付の扇面を示し去夏の感想を談す氏も亦大に快感に耐へざるの色顯著たるものあり喜を共にし追想描く能はず暑氣を忘れ會談多時祝盃を傾く誠に奇縁といふべし同氏辭去の後思はず知らず此稿を記す終に扇面の字句を列記して諸君の厚意を感謝せんとす
大正四年六月廿日水道完成
清泉始到於寄宿舎
○短夜や水槽にみづ沸々と 竹軒生
○生於憂患死於安樂 鼠肝生
○いく數のとき雄へてやつと出來たりすみをる流れ 也坊主
○今日よりば高く也鳥寛の音 江村案山子
○濁水に鯉魚住ますいよ／＼吾が學び舎も清水滾々として湧出するに至る 計介生
○玉水に流るる月の影止めて夜聲涼しく水鶏なく哉 吞天山人
○今日のうれしの祝のその元をたづねて見れば師の御恩 白 鴉
○清水滾々 森 次
○山奥の木々の榮えに水まして田毎ゆたかに見ゆる民草 愛林思想
○清水湧出懐師功 六 合
○不自由を常と思ふ不足なし 下平佐門
○青き山は清水の製造所なり赤き山は濁水の製造所なり

の製造所なり 鳴澤義男
○ねばすけやほとと醒鳥玉の水 岡田 籌
○木曾路まで學びのみちむけ入りて林の中に玉を捨はむ 松嶋長二
○この筆の墨は今日の玉の水 内田新之助
○清水到りて不自由を感せず 木下武夫
○我宿はすみて流れてわき出でし四時たねせぬ水の音かな 開運隆飛登
○播種せずして收穫を望むべからず先生の勞苦なくして今日の清泉に浴するを得んや 小原静雄
○吾々の生命は清水あり 安江悦次郎
○喜べや洗面所にも玉の水 伊藤俊夫
○永へに絶えぬ舎の名や玉の水 土井 薫
○谷川に流れし清き白玉の水 森本成美
○清き水に身をとき碧き山にて腕を鍊る 中川源太
○うれしくもちり行く水の濁かな昨日の流今日ののみよづ 清水徳久
○艱苦して貫き出でし清水には人の誠あらはれにけり 小田 實
○誠の力や通る玉の水 臼井信水
○昨日まで濁水ぞだちの我々が今日の玉水汲むもうれしや 加茂飛山
○爽かなる水と清き空氣とは元氣の源泉なり幸福なるものとは此の二つを有するものを云ふ 山下藤水
○我等の造りし林は遂に我等の命をつなぐ

玉水の源となれり 平田美則
○岩ヶ根にじばし宿りし玉水も嵐の宿を訪れにけり 長坂東州
○青々と溢るばかり玉の水 廣瀬運平
○玉の井の心を清む泉かな 林 森
○玉水に顔ひたし幾昨日今日 藤 原
○螢飛ぶ此夕ぐれに集して師恩を汲まん此真清水に 香 電
○玉水にこもる恵や長しへに 第一室
○玉水にすぎし昔を思ふかな 横 井
○今日を記念に此のよろこびを 梶 田
○嬉しきよ寄宿に水の溢れ幾 神 原
○君の恵を長く忘れじ 村 上
○喜水 澤 田
○君が許にわかちやるべきすべもがな山よりひきしこのま清水を 第三室にて宮下、奥村、岩田
○清き水寮舎の中に溢れけり 前野、小澤、赤羽、拓植
○君しりて功の水は溢れけり 藏田、樋口、藏尾、宮川
○玉水のわくや功ともろ共に 長州の二人
○清月在玉泉竹縁送涼風是皆師之賜 由縁、中畑、宮島、高峰
○君が爲め庭にあふるる玉水を硯にとりて君のみもとに 森下、小岩井
○いかにせむ湧きて流るるまじし水を君のみもとに送るすべなし

第五室有賀、山崎、各務、皆川
○七轉八起 (達磨の畫を添ゆ) 純 雄
依是觀之に在職中水攻めの當時に於ける小生の頭腦は自ら興奮せられ心中の炎熱又醫するも方法なかつた今水道工事の完成祝を聞くに至り遂に往年の炎熱は心頭より滅盡して涼氣水の如く襲ひ來るを覺ゆ小生が現今の立脚地に於ては信州の利水問題並に治水問題の根本の責務を有す之れ實に現今林務行政の一大任務上雄々しき大問題なり全信州の水の問題は誠其範圍廣く且其繋る所獨り信州のみに止らず信州を包圍する所信水の流るる所の住民の安寧幸福に關與せざるなし之等解決の爲めには百年の歲月を要す然かも其心を心とするには全信州の官民の協力一致林業思想普及に待たざる可らざるものありとす。古語に曰く得隴望蜀と人生の行路に横る小問題の解決又一憂一喜の伏するあり大問題も亦自ら百憂百喜の間隙に解決を告ぐるものと信ず寒去暑來自ら其時あり嗚呼時なる哉治に居て亂を忘れず守成に處して創業の難を忘れざれば人生の行路將た何物をか恐れんやである歡喜の餘り聊か所感を述ぶ。終りに臨み拙作を添へて扇面の返歌となし讀者各位の御判讀を乞ひ併せて暑中各位の御健勝を祈り尚亦平素の

疎音を謝す(七月四日稿す)
○玉水の清き流れにゆあみして 心洗へまなびやの友
○眞清水を硯にうけて認めし 三十一文字をゆかしかりける
○沸々と流るる水の音聞けば 夏の暑さもしられにけり
○嬉しきやこゝにもひやく玉の水 新しき水莖の跡扇子かな
我が文章 綠 山 坊
文章とは思想を文字に現すものなれば誰にも書ける筈なり然るに我が林友誌上を見るに四百有餘の會員を有しながら何時も二三の人の占有物かの如き感がある之は如何なる理由かと考へて其原因を見付けたる當るも八卦當らぬも八卦若しも僕の考た理由が諸君の意に満たぬことあるも決して怒らずに居て呉れ給へ曰く日本は文章より見て未だ獨立國にあらず支那の屬國なり 苟も日清日露の二大戦役を経て世界一等國の伍伴に列したる皇國を辱むる不穩の言なりと不肖僕も思はぬにはあらねど日本人一般が文章と云へば倒な漢字を澤山並べた

り即ち一言にして曰へば漢字を澤山書かねば文章にあらざる言ふ様な封建時代の思想を今日尙其儘に持ち居る事は事實なり平素に互に用ふる語は俗語として文章には用ひぬ語なり支那人の用ふる語は立派なる文章語なり成るべく聞き慣れぬ語を用ふべし支那まがいを作るべし四角な面倒な字を書くべし讀む人に通し悪く作るべしと考ふるものあり之程自國語を輕視する國民は朝鮮人を除く他にはなしと云ふ事なり

な書方にあらざるは猶太國かポーランドかアルサスローレンスか但しは朝鮮か印度か亡國の怨は長く忘れ難しと云ふ有様なり一昨日も本縣技手の同窓生松澤君が出張の途次當地に立寄り鑛業所構内を見物したいと云ふから僕が同道して今度新たに出來た住友肥料製造所を見物した案内者は高商出身のホヤ／＼學士なり僕等の案内者としては別に不足は云へないが其説明が甚だ氣に入らぬボーラーとかローリングとかエレベーターとか一々毛唐語で説明する之れを日本語で説明すれば何が悪い僕は勿論だが松澤君も餘りよくは判らなかつたであらう

形容なりとは案外なり斯る習慣より四角張りたる漢文を貴び忽驚く大蛇の途に當つて横たはるを剣を抜て斬らんと欲すれば老松の影などと武士の風上にも置けぬあはて者の頂上なるに漢詩なれば有難がつて神聖なる校友會の席上などで大聲をあげて吟ずるものがある

言と云ふところなれ共こんな文章にては讀み終らぬ内に鼻を拭くと請合也龜が腕には骨がある云ふ一句實に千斤の重みあり押へつけてギューツとも云はさぬ我と思はん人は漢文にでも獨逸語にでも譯して見給へ要するに我が文章は平易に誰にも判り易く書くを與義とす(實際は出來ないが)然るに林友誌上に現はるゝ余が文章は必ず五つや六つの誤字誤植のないことには甚しきは一行全部脱落して居たことがあるこんな文章では誰にも判る筈はない

五名教授一名來校參觀、越えて十二日には帝室林野管理局講習員二十七名視察の爲來校せり因に右講習員二十七名中十一名は我校出身者なるが其姓名左の如し
嶽野 利雄君 千村善三君 芦澤庸三君 石會根四郎君 塚本三樹君 倉澤建雄君 小池金三郎君 下村 博君 遠山一郎君 長谷川義雄君 野尻慶助君
○助手任命、征矢氏後任として本年卒業の中田穰氏任命せられ七月十一日着任十二日講堂に於て新任披露式を行へり
○森林旅行、七月十二、十三、十四の三日に涉り三年生一同は小川トヤマキ兩方面に分れ北村島内の兩教諭に夫々引率せられ、伐木運材其他に付詳密なる視察を遂げて歸校せり

大正四年度校友會豫算に關しは豫て各部長及顧問に於て原案を作製し七月七日總會を開き七宮會長より内容の説明あり討議に附せるが多少修正の結果左の通り可決決定せり
大正四年度校友會豫算
收入之部
一金參百八十圓
内 譯
金三百五十圓
金五十圓
金二十九圓五十錢
支出之部
支 出 總 額
一金三百八十圓
内 譯
金百三十三圓五十錢
金五十八圓
金五十八圓
金二十五圓五十錢
金三十圓

通信

○來校視察者、七月九日東北大學林科生十

○夏期實習本校夏期實習は愈々十五日より着手せるが同日始業前校長は一同を講堂に集め實習に關する一場の訓辭を述べ實習中の攝生其他につき戒告する所あり一同健全無事にて此實習を完了すべきを希望されたり實習の期間事業等左の如し
一 期間 七月十五日より三十一日に至る
一 七日間
(但し日曜祭日を除く)
一 事業 一、二學年は苗圃、造林地、農業地、植物園等手入
三學年は測量、測樹
一 就業時間 午前七時より正午に至る迄

校友會記事
○大正四年度校友會豫算に關しは豫て各部長及顧問に於て原案を作製し七月七日總會を開き七宮會長より内容の説明あり討議に附せるが多少修正の結果左の通り可決決定せり
大正四年度校友會豫算
收入之部
一金參百八十圓
内 譯
金三百五十圓
金五十圓
金二十九圓五十錢
支出之部
支 出 總 額
一金三百八十圓
内 譯
金百三十三圓五十錢
金五十八圓
金五十八圓
金二十五圓五十錢
金三十圓

○來校視察者、七月九日東北大學林科生十

金二十五圓
庭球部費
金二十圓
遠足部費
金二十圓
豫備費

寄宿舎通信

岩田 元吉

濃々たる雨霧の帷新に開かれてより暑威頓に如はり昨日今日は實に銀線三層八十八九度を示し申候、斯く申せば、雨れでは關東や關西地方の暑さと變りない、そんな暑所へ避暑など、行く人が分らん」と
拾 難き山由多候へばなり、即ち都會の地方にありて暑さや蚊軍に攻められて身體の置場にも苦しむ今日此頃の夕べこの地に於ては晝とは全く季節を異にせる涼しさにて氷嚙ますとも團扇使はずとも翠嵐自ら身に迫りて晝の暑さを遺るべく、又蚊屋吊らすとも蚊や煩べすとも一羽の蚊の見舞ふ事なく剩へ至る所に沸々として玉の如き水
お玉の如き水と申せば之につきていと喜ばしき事有之候
御承知の此地は元來水の清冽なるを以て名あれば「凡ての完備せる寄宿舎に水を憂ふる事よもあるま」と思召さるゝ方も有之候べけれど實はさむらで從來絶むざる

事續の如きなきけなき水に百餘名が命を繋ぎ居り我寮は水不足濁水断水などの惨めなる歴史に埋もれ居り候、然るに嬉しい哉去るぬる月の廿日の夕瑠璃の如き而も多量の水は我が舎に着き申候
着いた言へば急に地から涌いたか天から降つたかの様に聞え候へ共、そは黒川を隔てて遠く眞瀛習林より可成難工事によりて引かれ且つその夕べこの水が着くに至りしは前校長安藤先生をはじめ舎監先生及び先輩殊に本年度卒業されし諸兄の誠意御盡力は疑うて此の麗しき水となれるなりと一同感謝 謝はざる次、候喜ばしき事とはこの事にて候
爾來徑三寸の鐵管には玉の水溢れて炊事場は勿論風呂場にも洗面所にもサラサラと微妙の調を奏で、瀧ぎ申候、其の徒に零れるを見れば一杯の水を得るにも炊事の婆に顔響められし昔を思ひ出して實に勿體なき様に思はれ候
昨六月廿日我が舎にとりて永へに忘るべからざる吉日に候哉
此の喜びを記念せんが爲め同廿七日夕水道落成祝賀會開催され候、嬉しさ餘りて我れを忘れて歌ふ者吟するもの水の清きと共に一層清き舍風を揚げよと叫ぶものなど中々のさきにて候ひき、此の席にて新家先生が「此の喜びを佛都の安藤先生に分ちたし、そ

は各自此の嬉しみの言を時節柄扇子にでも寄書きして送りては如何」との發議滿場一致を以て賛成し其後同三十日に和歌俳句短句など所せまきまでに書き付けて送呈致し候へ共溢るゝ喜びに筆伴はざりしかはかへすゝも恨にて候ひき
かくて七月五日安藤先生より之に對する返歌六種端書にて着仕り候
六月廿六日に室が有之候
其日は逸し申候へ共六月中前の池に鯉兒放たれ日々目に見へて太り今では二寸餘りに相成候
本日より愈々夏季實習開始され候、今や他校にありては暑中休暇も迫りて各自海に山に涼を索むるに腐心さるゝ時に當り生等は鉞や鉞を執りて苗圃に山に活動致すべく候
夏期休暇も八月一日より始まり候へばそれ迄は餘程日にやけ歸省の時は赤銅色の體軀提げらるべく又うれれが理想にて候
(七月十五日)

會員移動

○野澤博君は南滿州鐵道會社雇に採用せらるゝ事に決定
○羽田龍尾君は農商務省雇山林局勤務日光森林測候所詰を命せらるゝ
○倉科浦一郎君は今回愛媛縣技手愛媛縣林業技手に轉任

○木村康明君は帝室林業管理局鼓原出張所に轉任
○田中泰吉君、札幌支局在勤の處今回天鹽國中川郡中川出張所詰を命せらるゝ
○林卓二君は畑と改姓
○西入徳君は六月十六日着米左記に止宿せられたる旨通知あり
521 Curlewa St. E. Vancouver, B. C. Canada

○南勝右衛門君は病氣の爲山形大林區を辭し郷里和歌山縣日高郡湯崎温泉淡路屋方に静養されつゝあり
○平田稻雄君は今回東筑摩郡波多村林業技手として赴任の事に決定せり

會員計報

○武居文作君は七月 日小野瀧鐵橋通過の際誤つて墜落し非命の最後を遂げられたる由哀悼に堪へず謹んで吊す
○内田益治君は永らく病褥に在りしが去月廿七日長逝の趣尊のり通知あり哀傷に堪へず謹んで吊す
○上原上君は昨秋より病氣の爲故山に歸臥せられしが藥石効なく六月八日死去せられたり深悼の至に堪へず謹んで吊す

文苑

逝ける友 (二)

松樹庵

左の一篇は下畑君の知己星屋氏の寄する所である星屋氏は豊橋騎兵第十九聯隊に下畑君と共に服役して在營中の事詳細に知つて居るから送次寄書して下さる者である、今回は星屋氏の寄書に備へて掲げ次に新領土の生活、病中の事、最後等を語つて積である、六月を見て同感の或は苦言を寄せられた諸君に御厚意を感じます

松樹庵兄足下

前號に逝ける友と題して所謂山林學校氣質に投ずる清涼劑として硬骨男子下畑君の君の若き死を吊ひ併せて同窓の爲に意氣を擧げると云ふ足下の意氣を諒とし同君が生前社會から誤解せられて居つた裏面の消息を欺かず飾らず有の儘の事件を有の儘に寫し有の儘の情懷を有の儘に描いて此の通信を足下に致さうと思ふ

二十才を一期として死んだ君の生涯は儘に短かつたまた短くなかつた様な氣もする眞に數寄傳中のものである

山梨縣の山境生活から軍隊生活——憲法生活——放浪生活——腰辨生活——うれから其へと芝居の幕の色彩は變つて行つたけれどどこ迄も感情と俠氣で押し通して淺薄卑俗輕佻利口なる今の世には容れられなかつた感情も涙である俠氣も涙である

今この通信をするに當つて御知らせしたいと思ふ事は澤山ある何からわらしせしてよいか何處から筆を起してよいか迷はざるを得ぬ
他の事は同窓の諸君や足下に譲つて僕は主に軍隊生活に關聯した當時の事のみをおしらせするとしやう幸にして僕等しく君と軍營生活の苦樂を共にして且つ深く君の知を辱ふしたから這般の消息を良、知つて居ると信するから……

將發朝鮮望 狂 夫

萬斛咽無念淚 昔公左遷西海月
七度人生報復期 楠公誠忠兵庫浦
古來好漢多魔事 何憂足吾今日境
漫々波亂人生常 唯踏破人生意氣
望遙玄海大洋洋 今日立志渡朝鮮
先づ意氣は斯の如くに御座候

京城大和町一ノ一六八ノ二下畑徳十郎る亂暴なぐり書きのこの様な端書が四十四年の四月十九日の不關の消印で二十二年の朝僕の手許へ届いた
四月十八日の夕方とうとう首になつたからこれから朝鮮へ行かうと思ふと云つて別れに來た下畑君は遂に日本を去つた突嗟の場合に良くも準備が出来たと思つたまさか朝鮮へ行くといつても二日や三日の時間はあるだらうと思つて居た僕は少からず驚か

された
四月十八日の正午頃免官と云ふ有り難い御沙汰を受けて其の日のうちに下宿を片付けて賣るものは賣り拂ふ人には借りたものはキチンと返して友人や知己の所は暇乞に廻つて其の夜十一時何分か汽車で足かけ六年の間住みなれた思ひ出の多い豊橋を去つて下關からもうこんな通信をした
どこ迄も下畑式を發揮して居ることに同君の面目が躍如として居る逡巡と遲疑は君の大禁物で斬行と猪突が君の生命であつた正午急に首を切られて直に其の夜のうちに朝鮮行きを決定するなんて、が下畑式だなせ憲兵を免官になつて朝鮮に去つたか其の仔細は實に大畧次の様な譯だ下畑君が憲兵となつて(自ら好んで憲兵を拜命したのトやない)陸軍の司法警察行政の勤務に服して居た時にこんな事件があつた
其の特科隊の第一中隊に田中と云ふ新兵があつた其年の二月の末に一時の出来心で戦友の郷里から送つて来た一圓五拾錢の爲替券を盗んだ事は僅か一圓五拾錢の爲替券の紛失した事だが重箱の隅を揚子ではトくる軍隊の事だから詮議が非常に厳しい一寸の出来心で盗んだ田中は居たまらなくて暗夜密に脱營を計畫して豊橋の町の知り合の魚屋の二階にかくれて鼠の音にも驚きつゝ良心の攻苦に會つて三日計日をも

送つた脱營兵らしい男が魚屋の二階に居ると云ふ話がちらと下畑君の耳朶に傳はつた職掌柄捨てゝもむけなない單騎魚屋へ出かけて田中に會つた此時既に田中は前非を悔いて終始残る所なく偽らずに憲兵に己の罪を告白した
一時の出来心で人の物を盗んで直に郵便局で現金と替へて口腹の慾を充した其の額の八十何錢はまだこの通り持つて今日で三日と云ふものはビクビクして暮らした全日蔭物となつた事を悔い如何なる重刑に處せられてもいと云ふ事を涙と共に語つた此の憐れつばい物語りをきいてどうして知らん顔して規則通り處置をする事が出来様か
ヨシ僕が充分引き請けた貴様を罪人にはしない費消した七十何錢は僕が僕の財布をばたいて貴様に呈上する
貴様が爲替を盗んだのも逃亡したのも貴様が盗んだり貴様が逃げたのじやない不完全なる陸軍の制度が盗まされたり逃亡したのだとどうとう同情の涙と大氣焔とをチャンボンに出して可憐の一兵卒を救ふべく生來の俠氣を出すことにした晝の間は人目にくくから暗くなつてから田中をつれて中隊長某伯爵の私宅へ行つた
魚屋の二階にふるへながら潜伏して居たこと

金は全部消費せず持つてゐること
悔悟の狀顯著なること同情すべき點の多々なること
表向にせず憐れな一兵卒の罪を惡むで人を惡まざること
自分は憲兵の職掌を離れて田中の前途を思ひ中隊長の決心如何により表向きにせず寛大なる處置で内濟にしておきたいと熱辯を揮つて中隊長を説いた
中隊長は下畑君の言に感動してこんな要旨の事を話した
中隊は一つの家庭で中隊長は家長で兵卒は子弟である過去の經驗に徴するに一度兵卒に犯罪行為があつてこれに相當なる刑罰を科する時は後來捨て鉢となつて成績が面白くない自暴自棄の兵卒程著にも捧にもかゝらぬ者はない
憲兵にして事を顯わにせず一兵卒の心情を察し前途を思つて寛大なる處置を要求する君の俠氣と好意を徳として中隊長は決して彼に嚴罰は科せない只訓誡を與へて決して君の好意を無にしない
中隊長の感謝か言語と田中の悔悟謹慎の様子を見て下畑君はもう前後の處置も公私の區別もなく缺然として歸つた人一人助け得た心地は決して悪いものではない
田中は其の後原隊に復歸して神妙に勤務の練習に骨を勞するを惜まなかつた

中隊長も其の後の田中の言動を見聞して兵卒一人を儲け得たるを喜ぶと共に憲兵上等兵の仁俠を徳とした
三月の下旬に例によつて憲兵隊から郵便局へ軍隊に於ける郵便物の調査に行つた
天信書の取扱件数電報小包爲替等の兵卒と郷里との發着件数を調査するので殊に爲替は嚴重に審査することになつてゐる
憲兵隊から出張した憲兵が爲替券を一枚一枚調べて行く規則と規則に違つた中隊長の官職氏名捺印の有る可き爲替券にうれないのが一枚出て来た
それは前日田中が盗んで郵便局へ持つて来たのだ窃盗品だから無論中隊長の證明もない證明の無いのに現金を渡すのは局員の手落である
憲兵は憲兵隊に歸つて上官に報告すると同時に此の怪しむべき爲替券について調査をはじめた取調べの進行するに連れて同僚の下畑君が私情を以つて窃盜兵逃亡兵を曲庇した事が知れて来た
私情を以つて公務を省みなかつた感情の下畑君はとうとう此の罪で十五日の重懲倉と免官の二字を忝ふした
下畑君の言動は往々常軌を逸した様な事があつたが詮じつめて見ると何れも男らしき一點の邪氣の無いごんなことに向つても

眞情流露一片の骸骨は所謂今の利口な社會には累をなして官海游泳術などはたしかに下手であつた僕は今茲に此の稿の筆を擱くに當つて只この一言を切に思ふ
盛に山林學校氣質を養成し官界游泳術を鼓吹する淺薄な人間は下畑君の爪のあかでも煎して飲め
昔星氏の通信は之れで終りです
理性と云ふ冷やかな眼から見る時は下畑君の此行爲の如きは小節の爲めに大節を誤つたものであるだから重懲倉と免官を免れ得なかつた、云へば是れ迄である、以て一般の撲滅する事は出来ぬ、が人間の遺つた法と云ふものも決して完全の物は云はれない、只血あり涙あり人の運用をよつて始めて活用されるのである、法の缺陷でもなければ下畑君の罪でもない、名を教ふ覺悟を缺いたならば災である、けれ共知りつゝ死地に入る事は何人も常に思つて居るが切て其場に至る二の足を踏む
情の下畑君は此の如くにして朝鮮に渡つた、郷里に歸らず、一人の見送り人も無くして新領土に渡る彼の胸中は如何だつたらう、輕佻な世人の嘲笑をあびつゝ一兵卒の心からなる感謝を願つた時は如何な感かしたるう犠牲者たるに満足した輝ける眼は暗い前途を光明あるものに見る事が出来たらうか
利を追ひ恩を賣る人の忘れても爲すべからざる事である

朝日將軍本會義仲

H Y 生

朝日將軍!
嗚呼此語の何ぞ壯快なる
山高くして流清き木曾の山中そこに千古の英雄朝日將軍は生ひたりしなり此清き蘇水の蒼々たる一大森林等は未だのもしき少年時代の彼の腦裏をいかに清浄ならしめしことかといけなき彼は或は體々たる御岳の白雪と其白き心を競ひしならん或は山骨峨々たる駒ヶ岳の雄姿を眺めてはるの剛健なる氣象をや養ひつらん又は千山萬嶽の重疊たる狭谷を駿馬に鞭ち強弓を携へ猛き鳥獸を驚かし以て彼が機敏なる性質をこり作りけめ
彼が此の如き生活を反覆しつゝある間に進みすゝみてをやみなき時の流は刻々として流れ去り一少年たりし彼をして漸く少壯有爲の士たらしめたりあり此時にてありし以仁王を奉つて奮れる平氏討伐の軍を起せし人こそあれ源三位頼政即ち其の人なり不幸にして戦敗れ平等院の芝の上に空しく白骨をさらせしと雖も王の令旨は飛びて各地に潜みし源氏の人々に達したり山深き木曾の谷我が義仲の許にも亦至りぬ
嗚呼彼の若き血潮はこの時いかばかり躍りしことぞ!早く既に蘇水の流には翻々とし

て翻る白旗の映するを認めたり此白き旗色を眺めて馳せ集る諸國の志士實に數万餘騎其様あだかも大いなる磁石に數知れぬ鐵粉のこび付く如き感なくんばあらず此大軍に將としての彼は至る處に凱歌を奏し意氣天をつき都に上る有様宛然ら旭日の天空にさし上る如き勢ありしなり久しく泰平になれ榮華を夢みし平家は唯徒に周章し狼狽するのみにして此の勇將に對し施すべき術をすら知らざりきこの時我が義仲は數万の軍兵をひつぎて湖の如く京都の市中に流れこみぬ面して文弱の平氏を遠く西海に走らしめたりあゝ疾風迅雷の如き朝日將軍！彼をして一度劔をとりて戰場に立たしめんか實に鬼神をも恐れしむる勇將にてありき然れども惜むべし彼は豪勇の人にして智勇兼備の人にはあらずしが如し彈丸雨飛の間を往來し三軍を叱咤するの勇はあれども未だ戦はずして勝つての深遠なる智謀は持たざりき故に彼一度は朝日將軍の英名を普く天下にとりかかせしも僅か三十有餘の壯なる時代に鮮血をして空して粟津ヶ原に積れる白雪を紅ならしめたるを哀れにも又悲しあゝ彼は實に花と咲き出で花と散りにし快闘なる勇將なりき天若し彼に智と謀とを授け給はんか其の成し得し所豈彼が如きみに止まらんや

興亡幾度か變遷して星霜を経しことこゝに七百有餘年粟津ヶ原頭に残れる一本の老松今は徒らに古の名残をこゝめ梢を渡る風の音に元曆の昔を憶はしめ轉た感慨の情に堪へざらしむ心ある者は忘るゝな元曆元年春正月二十日の暮れがた落日將に沈まんとして千古英雄の末路を紅に染めなしたるをあゝ英雄の悲惨なる末路何すれぞかくも哀れなるや

夏の Sound

蘇翠生

春のシーズンは緑濃き若葉の上に水銀玉の様な露を置いて男性的な夏に入つて行く、金をも焼き溶すかと思はるゝ日はいやに輝いて居る俗界の総てのものが隅々迄で照されて何の陰もなく實に潔白である、天真爛漫とも言ふべきである窓前のやまならしのみは一掬の涼風吹き來る毎にサバ／＼と動揺してホワイトの裏を見せて急に豊富な風を送つてはルームを吹きさらして居る暑い中にも吾々の心を爽かにする唯一の友は此の木である見る毎に「やまならしもつと葉を動かせもつと揺かせ御前の葉が落ちる迄」と心の中に叫んだ桔梗色に澄んだ蒼穹にはミルク色の雲がなつかしく匂つて居るそして何ふの山には落

葉松が青々と涼しさうな、芽をふいて其の傍には黒きまで濃いもみ、つが、などが高く空を衝いて居る私はふと外へでたそして裏の杉林の中の若草の繁生れた床の上に腰をドツカとたろして静かにあたりを見廻した緑の野、緑の山、緑の畑、緑の川、私の目に展開されたのは緑の天地であつた黒色が悲哀を白色が無邪氣を赤色が赤試を表すならば夏は緑の夏は希望を象徴して居るのである希望の夏！血管を血が青春の凱歌を揚げて廻つた私は此の夏草のサウンドを聞きながら、ねむつて居た緑色に澄んだ空は木と／＼の間から見えて空寂して居る私の處に落ちて來さうであるもしも空が落ちたならばと空想を畫いて私は遽かに戰慄したそして目はだん／＼暗んで來た何處からか私を助けるゴツドの蟬はジジ／＼といつて流星の様に飛んだふと此の思は夢と消れて私は立ち上がつていつまでも立つて居た私は夏を讚美したい莊嚴なる活力を秘めた眞晝の林中の野に立つて虹の様な火の様な太陽の赤い光が中天より西に傾かんとする時若い顔を此の幸ある夏の杉林の中に唄ひたい詩人も吟へ歌人も歌へ此の若き胸を焼く焔の色を

栗の花 六合子

露孕む涼しき風は新樹に淡くまつはりて小馬追ひ行く乙女子の白い手拭いちらしや
快よきボブラのそよぎ静かな朝の氣を震はせキラ／＼と宿る露の玉ハラ／＼と散りぬ朝風に
小鳥の歌ふ眞向ひの林のはの白い栗の花風もないのに散るを見て小鳥首をかき上げては啼く
緑滴る中庭は強き眞夏の日を受けて緑の香心よく漂ひクロバーも白く匂らぬ
青田をめぐりいさ／＼川日高をあざり登追ふ子等の姿を見るにつけ吾が幼き日と思ふ
赤き夕日は今母任す方の連峰に沈みぬなつかし此胸はトマトの如く赤く赤く

短歌

狂人の歌 加藤ゆかり
擲てば礫も生くるや歎くべし淋しく鳴りて落つる事かな

睡下に藤村が書ける「家」を見て吾は淋しく行めるなりわが家は桑の實れ行き悪しと云ひ置伺ふと云ふぞ哀しからずやむつとして飯の悪臭の胸を打つ控室(通學車)に吾入り兼ねつともわが前を牛に鞭うち過ぎ行ける運送人の顔の淋しさ夕暮を狂人の歌よみ居れば狂女たどらの過ぎ行けるかも

薊草山われの若さに相似たる五月の草を踏みかねしかな照り初むる春日の柱の燈火に媚ぶるが如く夕暮るゝかな春日森杉の木蔭に小男鹿にもものなご遣るが嬉しかりけり初夏の夜の紀の海はうれしかり月の光に青き朝さす袖ひろき旅屋の寐まき身に纏ひ紀の三井寺に夜を行くかも阿寺の山
鯛と小川と青葉七月の阿寺の山は物思ふによし思ひ出は阿寺の山の家にして故郷遠く鯛を聞く七月の夕邊阿寺の山にして莓摘みつかかなを聞く若葉の闇 今井光風
五月間青葉の溪を見下せば星かと思はれてどふ登かな

俳句

白鳩の庭に餌拾ふ日永かな 横井正風
山道の里橋は朽ちて夏の雨 同
螢飛ぶ入江にはろし二日月 同

梅雨晴を苗圃に苗の手入哉 内山寛村 今井光風

二年級修學旅行日誌(承前) 五月拾六日 日曜日 小田 實

朝の程より天気晴明にして前日に劣ることなし豫定の出發時間までには未だ間ありとて一同身仕度を終るや思ひ思ひに町の此處彼處をぶらつく左程廣からぬ町を前夜足に任して廻り歩きしこと、今朝は格別見るべき所もなし只昨夜見ざりし海の景色を眺む可く海岸に行けば煙波縹緲として打開けたる太平洋の波よせてはかへしかへしては又打寄す深き木曾谷に學ぶ身には珍らしくも又面白し
間もなく町に歸る折しも頭上にブツブツと音を立て空を掠めて飛ぶものあり一同の目は驚きの色もて一齊に之れに注がれたりはは疎らにしたりし水上飛行機の飛翔なりき珍らしきの餘り目も離さず見詰める中に町の上を一廻りして遂に彼方の空に消ね失せたり
これより愈々本日の主目的たる軍港參觀に向ふ受付との交渉終るや先づ工廠の門に入りぬ第一に目に入りしは建造中の軍艦山城なり總噸數三萬六千噸我國最大の戰艦と聞く其の他五十噸百噸二百噸の重荷を自由に船上に載せ下しする海上グレン陸上グレン船渠工廠内の種々の機械等を見たりに軍港内には榛名朝日三笠筑波壹岐山風海風等の諸軍艦淀泊し其の中我々の參觀を許されたるは最大軍艦たる榛名なり一同は小蒸汽船の松により遙かの沖合に淀泊中の榛名に送らる青き水を白く蹴立て一歩一歩大艦に近づき進む時の快は一入なりき上甲板に至るや二十名宛二組に分れた一組に一名づゝ案内として兵卒を添へられ

たり而して面白き且つ詳細なる説明の下に
中甲板を見上甲板を見マストに昇る之れに
依つて艦内生活の一斑軍艦に對する新智識
を得たり本艦は總噸數二万七千噸十四時砲
八門を具へ最新式の軍艦にして霧嶋と共に
姉妹艦として我が國重要な戰闘巡洋艦なり
明朝は某地に向け積船することとなりき參
觀を可り同じく松により歸途に就く途中追
濱の飛行場故伊藤公が此の地にありて憲法
を草案せられたりと云ふ金澤文庫のある嶋
等を見る二人或は三人を載せ勇ましく波を
切りて進む端艇も心地よく見受けられたり
横須賀驛を後にして東京に向ひしは午後
の一時頃なり途中鎌倉に下車し各自隨意に
て名所舊蹟を探る軍艦内に多くの時間を費
せし爲め豫定の江の嶋見物は中止されたり
三三五二團となりて八幡宮に向ふあり建
長寺に赴くあり又鎌倉宮に詣づるもありて
何地も古き記憶を呼び起し過ぎにし昔をし
のびぬ

五月十七日 月曜日 松島長二

「今日は愈々東京見物なり」と起きみれば雨
劇しく降り一行は見物も駄目なりと眉を
顰め居しも暫時にして雨は衆皆歡呼す八
時といふに宿を出で第一に砲兵工廠に至り
參觀を求めしが同所は拜觀を許されず後樂
園のみを巡覽す案内者に導かれて園に至れ
ば種々の植物榛々とし繁茂し紛々たる
東京の市中に在りながら此は極めて幽閑に
して別天地の趣あり園の中央には琵琶湖に

象れる池あり甚だ廣く近江八景たる瀬田の
唐橋唐崎の老松あり一松は形近江のものに
酷似す此老松を選ぶ三十一年の日子を費
したりと云ふも宜なる哉
此一例を以て見るも該園が如何に意を注ぎ
あるかを知らるべし園内には又涵徳亭觀音堂
得仁堂八卦堂管門等あり涵徳亭の傍には三
代將軍の馬場あり馬術の練習後腰かけ休ま
れもまた腰掛の岩手巾掛の松等あり
池には趣味深き圓月橋道天橋等の架するあ
り或は三保の松原、川崎白糸の瀧、信州田
毎の月、寢覺の床、阿波の鳴戸等種々の景
ありて宛然天下の勝を一囑の中に收めたり
途中大學赤門或は家庭博覽會場の亭々ど中
天に聳ゆるれに飾れる萬國旗の翻翻たる美
觀を眺めつゝ上野公園に着す公園は松杉鬱
蒼交ゆるに櫻樹を以てし壯大にして雅趣あ
り先づ公園の奥清水谷なる動物園を訪づる
園内に入れば彼方に猛獸の物凄く山崩の如
き聲にて叫ぶあり此方には鳴禽の朝かに轉
るあり真に異境に入るの思あり
吾等は見るとも聞くもの珍しく足の疲れも
うちわすれて園内をかげめぐりまだ見ぬ種
々の動物の觀察に飽くことを知らざりき動
物園を出で其處にて一同解散し各自隨意に
宿にかへる

五月十八日 火曜日 小澤 武

空は克く晴れたり、九時といふに宿を發し
たる一行は電車を宮益坂下に棄て、半里の
路を辿りて駒場なる農科大學校を訪ふ嘗て
本校教諭たりし伊藤先生に案内せられて校
内を一巡す緑樹榛々たる植物園は初夏の蟬
聲を配して殊に吾等が最も深く腦裡に印せ
し所なりき
駒場を辭して澁谷より電氣鐵道に乗じて午

後一時目黒停車場に下車、直ちに路を目黒
林業試驗場にぐる其の猛威を逞うし暑に苦しみて
烈日漸く其の猛威を逞うし暑に苦しみて
覺ゆる疲勞は淋漓たる流汗と共に愈々募る
漸くにして達す
場内は流石に整然たるものある木材加工林
産物を始めとし林業副産物林業器具に至
る迄陳列しありて一目瞭然一巡直ちに斯道
百般に通ずるの想あらしめき
農園を辭したる一行は再び目黒停車場前に
集台し歸途につく是より各自隨意の行動を
許されれば或は補公像下を低目俯仰して
掛けまくも畏き大君が宮所を仰ぎ奉り
或は乃木坂に武士道の權化と稱せられたる
大將が尊き跡を拜し或は淺草寺に泉岳寺に
己がじき志せる地に向ひたる人々は十時
頃には悉く逆族の人となりて樂しき明日の
行程なんと思ひつゝ床上に臥するに身は何
時しか華胥に遊びて十八日の夜の幕はしづ
くと吾等がまはりを覆ひぬ

林友代領收報告

金壹圓 村松一清君
金壹圓 嶽野利雄君

○先年林教諭退職の切當時の寄宿生一同申
合せ茶器一組贈呈の事に決し居りしが先月
漸く贈呈の運びと相成り候間右御承知相成
度昨年四月及本年四月の寄宿生としての卒
業生に謹告す

大正四年七月廿三日印刷 (定價三錢)
長野縣西筑摩郡信州四〇四番地
長野市西後町四二番地 安井 正 夫
長野市西後町二二番地 田中 彌 助
長野市西后町乙二十二番地 中 彌 助
長野縣西筑摩郡信州四二九番地 長野新聞社活版部
發行所 所 藤澤 書店